

# 蛭谷を再び和紙産地に

## 伝承協議会設立 担い手を育成へ

「蛭谷和紙」の産地だった朝日町蛭谷地区の住民有志らが十五日、和紙産地の復活に向けて伝承協議会を設立した。現在、地区内に和紙をすける人がほとんどいないことから、担い手を育成し、和紙を再び出荷することを目指す。

山あいの蛭谷地区は、和紙の原料となるコウゾの産地だったことや、和紙をすくためのきれいな水が豊富だったことから、産地として発展。昭和初期には、主に冬場の内職として数十戸が和紙をすいていた。

しかし、戦後、働きに出る人らが増え、担い手が減少。現在は、地元で自然体験教室「夢創塾」を主宰する長崎喜一さん(七五)が、受講生に紙すきを教えているだけで、職業として和紙をすく人はいない。

蛭谷自治会館で開いた伝承協議



「蛭谷和紙」の産地復活を目指して設立した伝承協議会の発足会＝朝日町蛭谷で

会の発足会には、地元住民ら十五人が出席。会長に長崎さんを選んだ。年配の住民の多くが若いころ、家で和紙をすいた経験があることから、今後、講習会を開いて住民に昔覚えた感覚を取り戻してもらおうほか、自治会館内の工房ですいた和紙のはがきや名刺などの出荷を目指す。

長崎さんは「技術の習得には三年ぐらいかかるだろうが、担い手を育て、魅力ある和紙を生産したい」と話している。(伊東浩一)